

K O Σ M O Σ

Vol. 10, No. 4 (No.32) 1976. 4. 10

図書館の自由と民主のこと

重 富 健 一

図書館について、あるいは図書館との出会いについて、なにがしか人に語れるほどのものが私にあるとすれば、それは比較的最近のある特異の経験を通じてのことではない。

私はいわゆる戦中派に属している。私の青春時代と学生時代のほとんどは、戦時中と戦後の混迷期にあっていた。しかも、その少なからぬ部分が、尊皇思想や軍国主義的な精神風土のことのほか根深く強い九州地方の田舎町で過ぎた。そんな関係で、当時の私にとっては、図書館はたんに縁遠い存在ただただけではなしに、いささか「ケムったい」しろものであるか、およそハラの足しにならぬ「高嶺の花」のようなものとしてしか映らなかつた。このいまわしく不幸な映像は、その後も長く尾をひいて、私の図書館への馴染みを妨げたように思う。

ところが、およそ5年前——本学の現図書館が建築された直後のこと——たまたま、本学図書館員の配転問題が起き、私もその解決に深くかわらざるをえないことになった。こうして、私はいやおうなしに、図書館の在り方や機能、図書館員の職務や役割などについて、素人[な]りに、あらためて、いろいろ教えられるものがあつた。と同時に、それまでのいわば図書館アレルギーも癒え、図書館がたいへん身近かな、親しみのもてるものになったのだから、妙である。

この変化の秘密について、とくに思いあたる節がある。聞くところによれば、戦前と戦中のあの思想・言論統制と暗黒政治のもとで、図書館もその統制や弾圧への奉仕を余儀なくされ、一種の焚書坑儒の場と化したといわれる。つい最近、山口県立図書館では、首脳の一部が図書の運用にあたって故意の思想選別をしたため世論の指弾を受けたことは、一般になお記憶に新なところである。こうしたことは、図書館の（権力や政治からの）自由と図書館運営の民主主義がそこなわれるとき、図書館はその本来の正しい在り方や機能を歪め、国民大衆からも遊離せざるをえないことを教えているように思えてならない。

図書館と図書館員が諸君の伴侶の一人となるようなら、諸君の大学生活はいつそう思い出深い、人生の一駒になるにちがいない。

(教務部長・経済学部教授)

特集・私のおすすめ
一冊の本 2~5
指定図書制度について 5
本学に学んだ人々
—6—前川佐美雄
投書箱から 7~8
日誌(51年3月) 8

特集 私のすすめる一冊の本

はじめに 学生の皆さん、入学・進級おめでと。今年も新学期を迎え、図書館運営委員及び図書選択委員の諸先生にお願いして「私のすすめる一冊の本」の特集をいたしました。何を読むべきか「一冊」に限定することは困難ですが、人生の折り折りにふれて誰にでも忘れ難い一冊の本があります。この特集がそのような「一冊の本」との出会いとなってくれれば幸いです。

(注：掲載は執筆者のアルファベット順・文末の記号は請求記号)

アダム・スミス著
大内・松川訳
「諸国民の富」
岩波文庫
阿部照男
(経済学部助教授)

一冊の本をすすめるということは、大変むずかしいものである。誰に何の目的で、などと考え込んでしまう。個人的に好きな本、感銘を受けた本というのはある。例えば、スタンダールの『赤と黒』だとか、アンドレ・ジイドの『狭き門』だとかには、わが多感な青春がしみこんでいる。しかし、個人的にしかも人生の一時期に感銘を受けたという理由で、その本を不特定多数の大学生にすすめることは適当でないと思われた。そこで、社会科学とくに経済学を志す大学生のために、その洗礼の書ともいべき一冊の本をすすめることにする。アダム・スミスは1776年刊行の本書において、それまでの断片的経済諸理論と市民社会の理念とを統合することによって、近代市民社会の原理的構造を見事に描き出している。経済学つまりポリティカル・エコノミーは、本書によって誕生するのである。その後の経済諸科学はすべて本書に淵源する。本書は経済学におけるエルサレムである。友よ、いざ、巡礼の旅に出でよ！ (331.321:SA:9)

中根千枝著
「タテ社会の人間関係＝
単一社会の理論」
講談社現代新書
稲山幹夫
(経営学部助教授)

本書の基本的な論点は、日本社会は「タテ」の関係を重ねる社会であり、また、社会的個人の一定の質としての「資格」よりも、むしろ「ウチ」、「ソト」という言葉

に代表されるように「場」を重ねる社会である、と特質づけている点にある。

本書はごく気軽に読める手頃な日本人論あるいはある種の日本文化論の書物であるといえるだろう。しかし、他面、本書は、著者がまえがきでも述べているように、現代の日本社会を文化人類学的基盤に立って分析したものであり、従来の日本の社会を対象とした論文や論評とは性格を異にするものである、という点ですぐれて専門的な書物でもある。このことのゆえに、本書は読む人それぞれの問題意識や関心に応じて活用されるならば、その分析の論理のなご一層の展開と応用を可能とするかもしれない。たとえば、わが国の現実の経済や経営の制度や組織といったものの存在を考えると、またそこにおける人間行動といったものを考えるとき、本書から少なからぬ示唆をうけることであろうし、旧来のフレームワークにとられない新たな発想の基盤を構築することもできるのではないだろうか。(361.6:NC)

徳丸克己編
「酸素の化学」
共立社化学ライブラリー4
共立社 昭和48年

日野原忠男
(工学部助教授)

人間が生きる上で何が大切かを考えると、いろいろなものがあげられよう。物質的なものに限ると、まず空気であろう。大気中に酸素がなくなったら我々は1分と生きていられなくなる。次は水……。このような大気とか水と我々人間の生活のかかわり合いを自然科学の面から平易に解説した本は少ないようである。私はよその大学で地球を中心とした太陽系惑星の大気の垂直構造とその形成の化学過程や進化、大気

汚染などについて講議している（残念ながらこの大学では、このような学問体系から外れた雑学的要素をもったテーマについて講議する自由度を持たない）。この講議に上にあげた本が大変役に立っている。この本の前半は酸素の物理化学で分子の電子状態に関する基礎知識がないと読みにくいかも知れない。後半は酸素と生物とのかかわり合いが中心にかかっている。なお大気の上層部に於ける光化学反応や電離層、オゾン層の生成についてもふれてある。（発注中）

ハイゼンベルグ著 河野伊三郎・富山小太郎訳 「現代物理学の思想」 みすずぶっくす4 みすず書房 昭和34年 本多満男 (工学部教養課程助教授)

20世紀初頭、物理学は激動の嵐に襲われ全く新しい局面を迎えた。そしてその状況の中から物理学はボーア、ハイゼンベルグ、シュレーディン

ガー、ディラックなど多くの俊英をうみだした。新しい理論の誕生である。この本はその胎動とその矛盾の克服、なぜ矛盾を矛盾としてそのまま受け入れなければならなかったかを克明に記述する。そしてこの理論が隣接科学——化学、生物学、心理学などへの必然的発展を内蔵していることをあげ、哲学、特にカント哲学への疑義と再考をうながす。自然の中に存在している「リアリティ」とは何か？ 私が大学へ入って直面したのは何もかも分ってしまったような、それでいて全く融通のきかないガチガチの物理学であった。この本は私に物理学がいかにすばらしい学問であるかを教えてくれ、物理学に敢然と立ち向う勇気を与えてくれた。今年の2月1日、新聞はハイゼンベルグの死を報じた。古い世代から新しい世代への交代である。（421：HW：2）

磯倉有人著 「システム・クリエイター」 講談社 昭和45年 井出 翁 (社会学部教授)

この本は学術書ではない。求めている知識を直接に提供してくれるという種類の本ではない。通学中の電車の中でも読める

本であるが、後で考えてみる本である。

自分の中に潜んでいて、まだ発揮されずにいる力、従来と違ったものの見方、考え方、柔軟な発想力、新しいものを作るには何が必要かを考えさせ、多くの示唆を与えてくれる本である。

どうやったらよいか (how to do) のための本ではなく、自分が何をしたらよいか (what to do) を考えさせてくれる本である。事を行うに知識、技術、方法は必要で、大学でその事を多く学ぶであろう。しかし、最も大切なことは自分が何をしなければならぬかを考え、常に問題意識を持ち、自分の可能性を求め、主体性を確立させることである。その上で知識、技術、方法が本来の自分の力を発揮するために役立ってくる。自分の創造性を発揮させるのは自分以外にいないのである。この本の書名は、そのことを意味しているのである。（発注中）

岩淵悦太郎編著 「新版 悪文」 日本評論社 昭和36年 笠原英志 (工学部助教授)

「フランス語が論理的なのではない、フランス人がそれを論理的に使うのだ」といった人がいるそうである。

日本語論ブームとかで、最近では言語の本質に関する興味ある議論もなされているようであるが、一方では相変わらず、「日本語はアイマイだ」「日本語はむづかしい」などと徒らに不毛の意見のみを述べる人も多い。しかし今大切なことは、まずその日本語を明解に、誤解のないように使う技術を考え、学ぶことであろう。

本書は（少し古いものであるが）そのような目的で、分り難いあるいは誤解されやすい文つまり「悪文」の実例をあげながら、明解な日本語を書くために注意すべき点を説明したものである。

ここに書かれている内容はとくに目新しいものではない。むしろ唯の常識に過ぎないといえよう。しかし、このような常識を多くの人が実行しようとする心がけていくことから、論理的な日本語が生まれてくるのだといえるであろう。（発注中）

末川 博著

「権利侵害論」

日本評論社
昭和44年2版7刷

三野 陽 治
(法学部助教授)

現代の私法は特定の個人に権利を与えて私法的秩序を維持するものであり、私法ことに民法は権利本位に構成されていると

法律を学ぶ学生諸君が読んでいる代表的な民法の教科書の冒頭に書かれている。民法を学ぶためにはその中心をなす権利の概念を理解すべきであり、またこれは民法全体を勉強してはじめて理解することができるのであるが、このような理解をはやめ、そしてはやく民法に興味をもつことができるために、これから民法を勉強しようとする諸君のみならず現在かなり勉強している諸君にもこの『権利侵害論』を読むことをすすめたいたいと思う。勿論民法上権利は個人のためのみでなく、社会共同生活のために存在するものであり、この社会共同生活との調和の立場から権利濫用を禁ずる規定がおかれているがこのような観念を明確にするためにもこの本は参考になると思う。この本は不法行為制度を歴史的及び比較法的に研究し、違法性の概念を理論的にまた判例により論じたもので、かなり難しい書物であるので時間をかけて読んでもらいたい。

(発注中)

大江一道著

「歴史を見なおす」

大和書房 昭和51年

田中 陽 児
(文学部教授)

—世界は良くなっているのか—というサブタイトルがついている。文明の進歩と発展、それが人間の歴史

なのだという明治以来固定化した啓蒙史観に抗議する本書の基調音である。全体は、「歴史は何の役に立つのか」からはじまる11章にわかれ、佐久間象山、津田左右吉、安藤昌益、章炳麟、魯迅、ルソーなど、具体的な人物が登場し、進化論受容の問題点(中国との比較)、世界史・西洋史教科書の内容検討、中国認識の一貫性のなさなど、個別のテーマにもふれているが、大きな柱になっているのは、近代主義への批判と、主体的な歴史認識の創造への訴えである。

新書版200ページほどの小冊子であるが、生き

る証しを求めて歴史に迫る著者の胸中は鮮明であり、読者はそれを通じて現代の歴史認識がぶつかっている多くの難問題にふれることができる。文体は平明だが、語られていることは批判と検討の情熱をかき立てる。本書自体もその一対象となりうるのである。新入学生と年輩者の双方にすすめたい。

(発注中)

ライオンズ, J. 編

五十嵐康男他訳

「訳本 現代の言語学上
・下」

大修館書店 昭和48年

田 崎 勉
(短期大学英文学科助教授)

日本語、外国語を問わず、言語のもつ特性を全体的にとらえた入門書で、これまでに開拓された研究領域や研究方法を知るのに適している。

現在、通時的研究や文法研究の解説書は多く出版されているが、コミュニケーションの道具としての言語の種々の領域を広く知ることは、言語の研究者、学習者の両方に必要なことである。

言語音の知覚から、社会現象としての研究領域までを、それぞれの専門家が分担して書いた本書は、入門書としてだけでなく、隣接領域を知るためにも興味がある。

ここで、特に強調しておきたいのは、コミュニケーションの手段として言語を習得しようとする場合に、本書に述べられているような領域の知識が非常に役に立つことである。したがって、言語を習う立場でも、教える立場でも、このような知識の重要性はますます高くなりつつある。また、研究対象とする場合に、問題領域の設定には非常に役立つと思う。この種の本は、訳本だけでは、理解できない場合があるので、原書を併せ読まれることをすすめる。

(発注中)

ルイス・マンフォード著

生田 勉訳

「都市の文化」

鹿島出版 昭和50年
(旧版、丸善、昭和30年)

内田 雄 造
(工学部講師)

私の場合、「一冊の本」といわれるとささか困惑する。学生々活が長かったこともあって、濫読を重ねた。また、建築・都市計画に関わる

ようになってからも、生活を学ぶという口実の下に、専門書のかたわら、社会科学から「ボルノ」小説まで、相変らず濫読をつづけている。

読み方も、読書会で読んだ本、自己流に読み切った本と全く多様である。始めて資本論（資本の生産過程）を読んだ時は、その数学的論理明快さに感嘆しつつも、技術の本質規定、技術者の発生プロセスを説いた文献としての興味が強かった。

「柳多留」はくたびれた時の愛読書の一つ。「四疊半ふすまの下張り」のあのリズムは名調子だと思ふ。好きな作家はドストエフスキー。日本では、安部公房、埴谷雄高、吉本隆明等。

最後に標記の本について。アメリカの文明史家・マンフォードが、都市生活への愛着をこめて書いた文明評論、都市・都市生活を考える上で教えられることが多い。（361.48:ML:2）

指定図書利用案内

本学図書館では、利用者みなさんの勉学の一環として指定図書制度を設けています。

指定図書は講義に関連して、教員が学生に必ず読むべきものとして、指定した図書であり、これを図書館で備え付けて利用してもらうものです。

年々、利用率の向上、ならびに冊数の増加にとともに、利用者の便宜も考慮して従来の運用方法を若干変更しました。

以下、従来の運用方式との若干の相違、貸出方法、配架場所を簡単に紹介します。みなさんが勉学のために大いに利用されることを期待します。

1. 本年度より、指定図書のために、毎年手にする講義要項の講義紹介欄にテキスト、参考書と並べて新たに指定図書の欄を設けました。

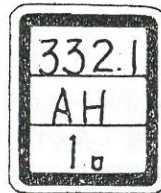
（この講義要項は学生みなさんに渡りますが、図書館の目録室にも一・二部全学部、および短大の講義要項を一冊に合本したものを設置しました。）

これにより、みなさんが受講する講義に指定された図書の有無、書名等がわかります。

これにとともに本年度より新に指定された図書については新方式の表示で貸出されます。なお、従来より指定の図書については整理の都合上本年度は従来同様の方式とします。従って貸出方法は以下に例示の新、旧ラベルの二通りによりますが、将来は一本化する方針です。

例

（旧ラベル・ブルー）



（新ラベル・オレンジ）



←学部

←教員名

←整理番号

2. 貸出方法

一般学生の館外貸出冊数は2冊までとし、期間は一般図書と同様一週間とします。

ただし、一般図書を2冊まで貸出している場合は貸出を行いません。また指定図書の性格上継続はできません。

3. 設置場所

指定図書は2階の開架書庫内の壁面にわかりやすいよう一般図書と区別し配架してあります。

配架順序は入口左壁面より、教養、文、経済、経営、法、社、短大の順に、学部内は指定図書申込教員名のA、B、C……順になっています。

なお、質問等がありましたら遠慮なくカウンターで係員にお尋ね下さい。



《本学に学んだ人々》—⑥—

歌人 前川佐美雄氏

平野宣紀

本学出身の歌人中、その知名度の点では前川氏を以って第一といえよう。「朝日新聞」の日曜歌壇の選者であり、三十種に及ぶ歌集や選集、鑑賞書の類を刊行し、改造社や創元社の「現代短歌全集」にもその作品が収録されている。それに四十七年には角川書店から発行の歌集「白木黒木」によって第六回釈迦空賞を受賞している。之は同じ年、読売文学賞を受けた矢張東洋出身の坪野哲久氏と並んで本学出身歌人の晴れがましい出来事でもあった。先年短歌新聞社から出た現代歌人叢書の前川佐美雄歌集「方響」の巻末には略年譜が附されている。それによると前川氏は「大正十一年（1922）十九歳四月、東洋大学に入る」とある。本学校友名簿には大正十四年三月卒業になっているから符合する。筆者が本学に入学したのは十三年で前川氏三年の時に当る。一年間同じ白山台上に学んだ訳で、この間直接前川氏と知り、卒業後も本郷の下宿を訪ねたりした記憶がある。氏は当時既に「心の花」の有力な新人として歌壇的にも知られており羨しかったものである。

前川氏は現在は神奈川県茅ヶ崎に住まれているが、郷里は奈良県、六年前迄は奈良市に永く在居された。その前、昭和の初年から八年程の在京時代が例の華々しい歌壇革新運動の活躍期に当る。年譜には昭和三年（1928）の項に「新興歌人聯盟、雑誌「尖端」、短歌前衛、「エスプリ」などに関係する。」と記しているに過ぎないが実際には紆余曲折、集散離合、波乱万丈の時代であった。初めは歌壇の所謂プロレタリア運動の同志として合流したのであったが、やがて階級運動とは凡そ無関係な芸術派的浪漫主義的な同人誌の創刊に変貌していったようである。その辺の変幻自在な転身振りも前川氏の才能といえよう。六年には「短歌作品」を創刊、九年には「日本歌人」と改名して主宰、一時は文壇や詩人との華やかな交流振りを見せた。現在も月刊されているが、不思議なことに前川氏も縁夫人も作品を見せていない。そういう点まことに我儘で傍目にもはらはらさせ

られるところがある。天才というものにはそういう一面もあるらしい。ここには「白木黒木」から三首を引いておく。曾っての派手な表現は年令のせいもあるのか、既に淡い写実的作風を示すに至ったが流石に濶達秀抜な佳品といえる。

竜門の滝を見て立つみづ痩せて

岩を三段（みきだ）になりて落ちくる

おん祭の後宴の能にいただきし

むかしかなしき一椀（いちわん）の汁

篝火（かがりまつ）燃えさかり芝生暗くなりぬ

後宴の能も夜に入りたり

× × ×

著作

歌集一植物祭（第一歌集、昭和5年） 前川佐美雄集（6年） くれなゐ（14年） 大和（15年） 白鳳（16年） 天平雲（17年） 春の日・日本し美し（18年） 金剛（20年） 鳥取抄（21年） 一莖一花・積日（22年） 搜神（39年） 白木黒木（46年 当館所蔵『現代短歌大系』三一書房、第3巻 請求番号=911.167:OM:1-3）

評論集=短歌随感（21年）他



参考図書の問題

—民俗学に関するもの—

①民俗学辞典 民俗学研究所編 東京堂 昭和33年 690頁 (380.3:M-2)

下記の②の事典が刊行されるまで、コンパクトな民俗学辞典として、永く重宝がられた辞典。

全体を農村、芸能、信仰など24の分類に分ち、そのもとに897項目を収め、その一覧表が掲げられている。従って、特定のテーマに興味がある場合、その分類の箇所を見れば、そのテーマに関する項目があるか否かを、一挙に見ることができる。検索の手段が、約1600の語数をもつ索引を併せて2本立てになっているわけである。

巻頭に「海女の分布」「頭上運搬の分布」「両墓制の分布」「民家の間取り」の4枚の折込み図を付す。

出版年が古いので仕方のないことであるが、旧漢字を使用しているために、若い方々には、いささか読みにくい点があるかもしれない。

②日本民俗事典 大塚民俗学会編 弘文堂 昭和47年 813頁 (380.3:O)

歴史学・人類学・宗教学・社会学などに対する柳田国男の影響はけっして小さいものではないが、こうした隣接諸分野の独自の著しい発展と、ブームとさえ言うほどの近年の民俗学への関心とその普及の中で、永らく待たれていた新しい事典。

上記の傾向は収録項目数が①に比べて飛躍的に増加(約3000項目)した点に表れている。

また索引の充実ぶりも見のがせない。①の辞典においては、ひとつの語が1~2箇所を指示する場合が大部分であるのに対して、この事典では数箇所を指示する割合が非常に高い(索引語数約4600)。しかしながら、指示箇所が余りに多数に亘る場合は、見出し項目のページ数のあとに、& *の略号を付けただけで、関連項目を検索する手段としての索引の機能を減殺している。①と同じく巻頭に分類項目表を付す。

なお両事典とも項目末尾に参考文献を示し、さらに理解を深めようとする際に、便利である。

投書箱から

1. 整理カードで調べて開架図書か、閉架図書か分らないのは不便なので何らかの区別をしてほしい。

(係から)

投書で指摘された通り閲覧目録には、開架図書か否かを判別するための区別はなされていない。そのため、投書者が感じられているように、不便な点が多々あると思われます。しかしながら、指摘されている問題点を早急に実現させるには、まだ多くの解決しなければならない点があります。

ご承知の通り当館における閲覧目録には、辞書体目録(著者名カード、書名カード、件名カード)と分類目録(アルファベット順に並べられている目録)と分類目録があります。仮にある種の図書一冊についてカードを作成するといえますと、最低4枚(著者、書名、件名、分類)は必要なわけです。その他に、共著者、訳者、編者、分出などについて、カードの作成が必要とされています。

現在、当館の蔵書冊数は、約30万冊に達していますが、前にも申しあげました通り、最低カード枚数が4枚としても、120万枚にもなり、共著者、訳者、編者、分出カードなど合わせますと、その枚数は推計でも150万枚にもなるのではないかと考えられます。

この約30万冊の蔵書の中から開架図書が約3万冊選択され、主として、教養書、入門書、概説書、利用頻度の高い専門書(洋書、雑誌は除く)が3層の開架書庫に並べられています。

この開架図書約3万冊についてのカード枚数に限って考えて見ても、大体12万枚~15万枚にもなっています。仮に投書者が指摘されたように、閲覧目録について「開架」か「閉架」の区別の標示を行うとすれば、閲覧目録の150万枚の中の開架図書分、12万枚~15万枚のカードに、いちいち整理作業を行わなければなりません。このことは、整理技術的には可能でも、実際面では、極めて困難なことです。

そこで、図書館としては指摘されたような不便さを充分考慮して、開架図書の事務用目録を設置し、利用者の請求に対してその都度、適宜に開架

か閉架かの指示を与えています。

この方法によって、投書者の指摘される点は相当緩和されているものと思われます。しかし、これとて充分とは思っておりませんし、近い将来この問題を具体的に検討をし、利用しやすい方向で善処していきたいと思っています。

2. 1) 春季開館時間の延長について
- 2) 館員のカウンターでの応対について—無愛想な顔をしている事への批判—

(係から)

1) 公共図書館においては、毎月末日に閉館し整理日に当てているところもありますが、本学図書館は、春季休暇中(後期授業終了後より4月の授業開始日)を年間の整理期間とし、利用者のための利用しやすい体制を維持するため、蔵書の管理状態を明確に把握し、個別のかつ総合的に準備作業をおこなっています。例えば、現在約5万冊(開架図書及び参考図書)一冊一冊の照合、点検作業があります。さらに、この作業から判明する年間約500冊の紛失本のリスト作成並びにその発注=補充等の追跡作業が続きます。館員は、これらの作業に総力をあげて取りくむこととなります。

このような次年度開館をめざしての準備作業に約1ヶ月要しますが、これまでも投稿者の要望に対し、積極的に応ずるため、人員を増加しながら作業過程の合理化をおこない、さらにこの作業中にも一部の閲覧室の開館をおこなっています。しかし、この間の開館時間については、前記の理由に加え、この時期に入学試験等の全学的な業務に向向することなどもあり、要望に応じていくためには、かなりの時間を要すると考えられます。

現状では、前述した作業内容の全過程を終了するには、コスモス Vol. 10, No. 3 掲載の時間帯になりますが、図書館は、このような状態が最善であると考えているわけではなく、一部二部とをわかつたず、全学生が4月の授業開始時を待たずに、全面開館(午前9時~午後9時30分)=利用できるように、現在館員一同均しく努力しています。

皆様のご協力をお願いします。

2) 御指摘の点につきましては、私達も深く反

省し改めて対応業務のむづかしさを学びました。

私達も一所懸命やっていますが、投書者の意向にそえなかったのはとても残念に思っております。カウンターは図書館の顔にもあたるものですので、今後ともみなさんに親しみのもてる図書館となるよう努力するつもりでおります。

訂正 前号 (Vol. 10, No. 3) の記事を次のように訂正いたします。

訂正箇所	誤	正
P. 2 右下から11行目	昭和49年	昭和46年
P. 5 左側上から3行目	応化D 1	応化大学院D 1
P. 7 右 // 7行目	応化一年	応化大学院一年
P. 12 // 17行目	図書館専攻...	図書館学専攻...
P. 12 // 24行目	図書学専攻...	図書館学専攻...

日誌 (51年3月)

- 3月5日 愛知学院大図書館横山、佐野両氏、見学のため来館一視聴覧室を中心に—
- 9日 私大図協東地区部会(於私学会館、世良出席)
- 10日 白山連絡会
- 11日 臨時連絡会 滞貨図書問題について討議
- 12日 「哲学堂文庫」の整理作業を終る
- 17日 図書館運営委員会 館長選任の制度問題について審議
- 18日 臨時連絡会 滞貨図書問題について討議—館内に本件解決のための検討委員会を設置することを決める—
- 23日 高橋副館長より、「戦後の本学図書館の歩み」をきく
甲南大学図書館長三島康雄氏、見学のため来館
福岡女子短期大学事務長鶴卓氏、見学のため来館
- 31日 高橋誉文(副館長)退職

編集後記

いつのまにか桜の時期になり編集を担当して一年が過ぎてしまいました。未経験者が多く、編集の難しさや紙面の足りなさを痛感しました。種々の御協力ありがとうございました。